

総合診療室（総診）を経験して

臨床実習を経験して

歯学部6年生 夏梅和子



昨年12月から総合診療室にて、実際に患者さんを担当させて頂くようになり、私にとって一番の課題は、歯科治療は筋書き通りには進まないということでした。臨床実習以前の講義では、教科書に従って理論的なことばかりを学んできましたが、実際の臨床では、様々な視点に立って、それぞれの患者さんに適した治療を選択していかなければなりません。それは、患者さんのニーズやライフスタイルにも対応し、かつ歯科治療の原則にも則ったものでなければなりませんでした。

治療計画を立案する際、総合診療室の特徴の一つとして、各科専門のインストラクターが、それぞれの専門的な知識や経験をアドバイスくださり、その意見を総合的に私達学生が判断、順序立てて考案していくのですが、実際には、患者さんの特性を私達がまずよく知り、それに合わせた治療法を選択するべきであり、教科書通りに進むことが決して適しているわけではなかったのです。

新潟大学では、臨床実習として学生一人につき、約10名の患者さんを担当させて頂けます。単純計算でも、6年生全体では600名程の症例をみたり聞いたりすることができるのです。同じ治療をしたとしても、その結果は全く違うはずで、その経験を一人のものとしてせず、共有できるのが今のこの環境です。たとえ自分が担当した症例ではなくても、これまで蓄積されたデータから勉強できることは多々あります。

私はこの恵まれた環境で勉強できることを誇りに思い、より多くの経験を総合診療室の先生方や周りの友人たちから学び、これからの糧としていきたいと思えます。

患者さんと接する中で経験すること

歯学部6年生 大科英和



総合診療室で実際に患者さんを担当させて頂くようになった昨年の年末から早くも半年が過ぎようとしています。昨年の12月は、5年次のポリクリで学生同士、歯の治療や麻酔などを行った直後であり、本当に患者さんを診療できるのだろうかと言う不安の中、一つ上の6年生の先輩から患者さんを引き継ぎ、担当させて頂くことになりました。患者さんの引き継ぎ時期は、総合診療部の仕組みやカルテの書き方などわからないことばかりで戸惑い、患者さんに迷惑をかけることもしばしばでした。現在でもあることなのですが、総合診療部の患者さんは、自分の失敗で患者さんに大変な思いをさせてしまっても、いつもやさしく寛容にしてくださいました。また、診療が終わると『ありがとうございました』と感謝され、反対に自分の方が、長時間の大変な診療に付き合ってもらってありがとうございましたという感謝と反省が入り混じった気持ちになります。患者さんの大切な時間を学生の教育のための診療に、長時間頂いていることを考えると、診療が終わった時は『おだいじにどうぞ』という言葉とともに、『ありがとうございました』『お疲れ様でした』という言葉が出てきてしまいます。

総診での診療では、自分の力で診療をやるのが自分の力につながり、その中で、それぞれの科

の先生方に指導を受けることでさらに深い知識と手技を得られるとても有意義な卒前臨床実習であると思います。この臨床実習の中から、特に患者さんと接することから得るものは多く、反省する

こともたくさんあります。これからの診療において、反省が自分の知識や手技に反映され、また、患者さんの治療のために活かされるよう頑張っていきたいと思います。

